

4年ぶりにリアル懇親会

秋田高校同窓会の令和5年度通常総会が6月18日、秋田市の秋田キャッスルホテルに約150人が出席して開かれた。総会では令和4年度の会計決算報告、5常置委員会（企画・財政・名簿・広報・ホームページ）と3特別委員会（150周年記念誌編集・新先蹤録編集・郷土創生）の事業報告を承認。令和5年度の事業計画と1790万円に上る一般会計予算が原案通り承認された。また、同窓会事務局から東肥羽城会の解散が報告された。

銭谷眞美会長は冒頭の挨拶で、コロナ禍がほぼ収束したことに触れ、世界的な混乱と悲劇を引き起こした新種ウイルスとの闘いの中、母校の卒業生が東大病院の院長や東北大学の医学部長などの要職にあつて「感染対策のために大変な活躍をされておられた」と紹介した。一方、芸術面でも、秋田県民にもっと生のクラシック音楽に触れる機会を作りたいと、同窓生が演奏家の招聘から運営までをこく少人数で行っていることを紹介し「秋田高校は本当に素晴らしい教育をしている。誇りに思える高校だと感じている」と述べた。

続いて、柘植敏朗校長が挨拶に立ち、創立150周年に当たる今年、第1回



銭谷眞美同窓会会長

全国中等学校優勝野球大会で秋田中学が決勝戦で対戦した京都二中の伝統を受け継ぐ鳥羽高校を招待した記念試合について話した。この108年前の試合では秋田中学が敗退したが、6月1日の試合では4対1で勝利した。直前に台風が来るなど心配された天候も選手たちに味方し、両校の校長が当時のユニホームを着て始球式を行ったエピソードなどを紹介した。

150周年記念の一環で同窓会が体育館に設置する電動スクリーンを寄贈したことについて柘植校長は、「設置業者から200インチまではよくあるが300インチはなかなか出ない。堂々していると言われた」と述べ、同窓会に感謝した。また、今年は希望者の中から選抜して行われる10日間の

米国研修「北雄の翼」事業で、26人の生徒を米国ボストンに派遣する予定（当時）であることを紹介し、「参加者がさまざまな場面で活躍しているのを耳にしている。海外に行った生徒の成長を感じる」とし、「生徒たちの見聞を広げる事業を再開できたことをうれしく思う」と述べた。

さらに、この春の卒業生については現役浪人合わせて東大合格が6人だったが、推薦入試で2人が合格し、広島高校と並び、合わせて全国3番目だったことを指摘、毎年続けて推薦合格者を出せる学校は少ないと強調した。その上で、「引き続き生徒たちが行きたい大学に行けるように応援していきたい」と述べた。全県総体では団体競技で男子テニス部、男子バドミントン部では団体、ダブルス、シングルスに優勝者を出すなど好成績を上げた。全国総体への出場者は過去最高だった前年の31名を超えそうで150周年にふさわしい成績を取めた。囲碁部、将棋部、放送委員会など文化部も頑張ったことや、初開催された県高等学校弁論大会でも全県優勝し全国大会に進んだことを挙げ、「非常に頑張ってくれている」と強調した。

ただ、多くの社会活動でコロナによる規制がなくなつた一方、7月2日の秋高祭では一般の来場を規制したことと言及、「まだちょっと気をつけなくてはと思っているが、来年度こそは幅広い人に来場してもらえることを祈っ



ている」と述べた。

続く記念講演では、週刊朝日の編集長時代に2012年の新語・流行語大賞のトップテンに選ばれた「終活」という言葉を考案、存続が危ぶまれていたアサヒカメラの編集長としてヒット企画を連発、現在は株式会社キユービックでゼネラルマネージャーを務める佐々木広人氏（平成2卒）が、かつての鈴木健次郎校長の言葉「汝、何のためにそこにありや」が氏の仕事でも座右の銘になっていたことを明かし、この言葉の持つ意味の重要性を強調した。（講演の要旨は8〜9ページに掲載）

懇親会の乾杯は、参加最高齢の嵯峨正博さん（昭和27卒）。若い世代の齋藤恵美さん（平成12卒）が中締めを挨拶をし、一本締めで、4年ぶりの懇親会はお開きとなった。